



横浜の私たち

という場合、広くは生活環境の充実とも密接に関連をもたせつつも、より具体的には、従来の貧困者対策としての社会福祉の概念をこえて、市民の生活のすみずみまでもカバーできる概念で用いることが最も適切である」と述べられている。市民が期待している福祉は、そのようなものと理解されてもよからう。

4 生活意識

広い意味の
中間層意識

物価の高騰、老後や病気の不安、住宅難、公害による環境悪化など、深刻な問題にとりまかれながらも、市民の気持ち

のなかには、なお楽天的な一面もみられる。

たとえば、いま住んでいるところを「住みよい」と感じている人は六割にも達し「住みにくい」はわずかに一割余りである。また、毎日の生活をひと口でいうと「満足」派が過半数を占め「不満」派を上まわって

表-10 勤労者世帯消費支出構成比の推移

	昭和 44	45	46	47	48
食料費	33.2 (32.8)	31.2 (32.2)	31.2 (31.4)	30.7 (31.0)	29.8 (30.1)
住居費	10.0 (11.4)	11.1 (11.2)	10.9 (11.5)	11.5 (11.3)	10.5 (10.8)
光熱費	3.4 (3.7)	3.1 (3.7)	3.3 (3.7)	3.4 (3.5)	3.2 (3.4)
被服費	9.8 (10.9)	10.6 (10.7)	10.0 (10.7)	9.9 (10.7)	10.6 (11.2)
雑費	43.6 (41.2)	44.0 (42.2)	44.5 (42.7)	44.5 (43.5)	45.8 (44.5)
消費支出総額	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)

注：上段は横浜市，カッコ内の比率は全国，数字はパーセント。

いる。しかも、前述したように程度の差はあれ、インフレの打撃を八割にもおよぶ市民が受けているにもかかわらず、五割の市民は暮らしむきに「少しはゆとりがある」と答えている(図8)。横浜市民の収入が全国



市民の暮らしと気持ち

表-11 横浜市民の一世帯あたり一カ月間の収入と支出（勤労者世帯）

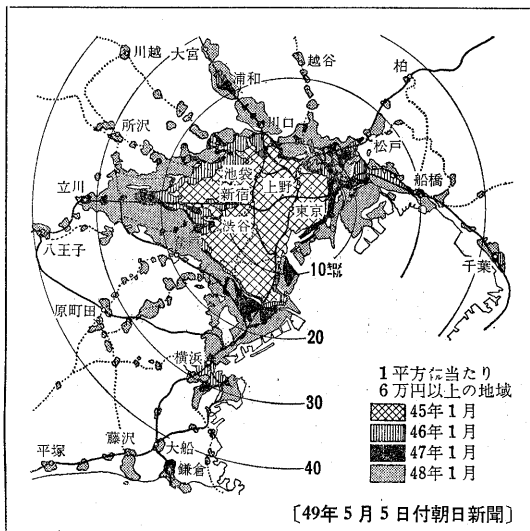
（単位：円）

	〈横浜市〉			〈全国〉	
	実収入 総額	世帯主 収入	消費支 出総額	実収入 総額	消費支 出総額
昭和44年	106,297	83,827	78,432	97,667	72,603
45	135,295	109,528	100,193	112,949	82,587
46	146,368	117,854	103,552	124,562	91,285
47	156,129	130,023	109,816	138,580	99,346
48	191,763	157,868	131,543	165,860	116,992

〔総務局統計課「横浜市の物価」〕

平均より高いということは事実だが（表11）、それにして五割というのは全国平均の三割（四十九年三月、NHK調査）をはるかに上まわる高い割合である。このゆとりがあると感じながら暮らしている五割の

図-9 遠のく住宅地



市民は、一戸建持家に住み、子どもも成人してしまつた五〇代や六〇代前半の人や、公営・公団住宅などの比較的若い居住者であるが、一五万円以上の収入を得ている人が多い。また、共働きの家庭や両親の家に同



横浜の私たち

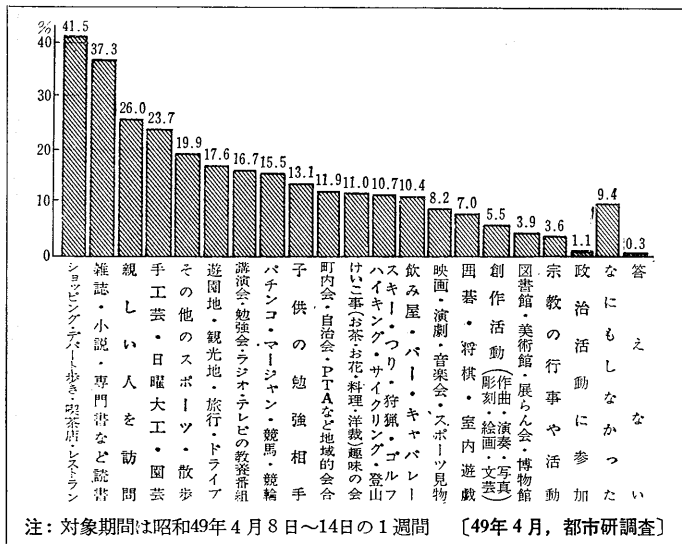
居している未婚の女性にもゆとりを感じている人が多い。この人たちにも、生活不安がないわけではなく、病気や老後の問題、また若い共働きの家庭では、育児や保育所の問題が行く手に待ちかまえているはずだが、現在のところ楽観的な見方をしている人が多い。

しかしながら、これら一応安定しているかに見える広い意味での中間層も、かなりの部分は、その生活基盤が決つて強いとはいえず、現状でインフレが進み、マイホームも遠のき(図9)、市民福祉がおきざりにされる状態の続く限り、その安定はくずれる可能性もあり、立場はきわめて流動的といえそうだ。

生活時間と年代・職業

さて、市民は仕事以外の時間をどのような過ごしにしているだろうか。一週間の間にしたことをあげてもらった(図10)。もっとも多くの人が行ったのは「ショッピング、デパート歩き、喫茶店・レストランへ行く」である。これは、とくに二〇代・三〇代の女性に多く、気軽にできる気晴

図-10 市民が1週間にした余暇活動〔複数回答〕





市民の暮らしと気持ち

らしとなつていようだ。しかし、これも暮らしむぎに困つていない人に多く、困つてい人ほど出控えていることがわかる。

男女を問わず二〇代では読書量も多いし、外出して映画をみたり、男性ではパチンコ・マージャンをしたり気楽な余暇活動をしているが、三〇代では家族むぎの行楽や「子どもの勉強相手」をしたり、町内会やPTAの会合に出席するなど家庭的あるいは地域的活動に重点が移り、四〇代ではこれに加えて「講演会や勉強会に行つたり、ラジオ・テレビの教養番組を視聴」する教養派が増える。五〇代・六〇歳以上では、一般的に余暇活動は低調になり、女性では「親しい人を訪問」して世間話をするのが主な楽しみになつていようだ。

しかし、年代によって特徴があると同時に、職業や暮らしむぎによつてもちがいがあつた。なかでも特徴的なのは労務職の人で、この人たちは映画や演劇をみたりスポーツの見物をするなどのことは少なく、読書も

しないし、図書館や美術館に行くこともほとんどない。何かをするとなれば「パチンコ・マージャンや競輪・競馬」か「囲碁・将棋」などがあげられるが、むしろこの人たちは、仕事の忙しい自営業の人たちと同様、仕事以外の時間は休息をしている人が多いようだ。その点、余暇時間はなく、あるのは休息时间といつた方が適当かも知れない。

暮らしむぎと時間

市民は、十分な時間的なゆとりをもつて生活をしていようか。たとえば勤めている人の通勤時間をみると、平均片道四七分である。とくに通勤時間の長いのは、旭・緑・戸塚・瀬谷などの周辺区に住んでいる人々で、一時間以上かけて通勤している人がほぼ半分にも達している。市民の生活はけっこう忙しそうだが、一日のなかでもつと時間のゆとりがあつたらどんなことに使いたいか、不足している時間は何だろうか。

比較的暮らしむぎにゆとりのある若い人には「レジ



横浜の私たち

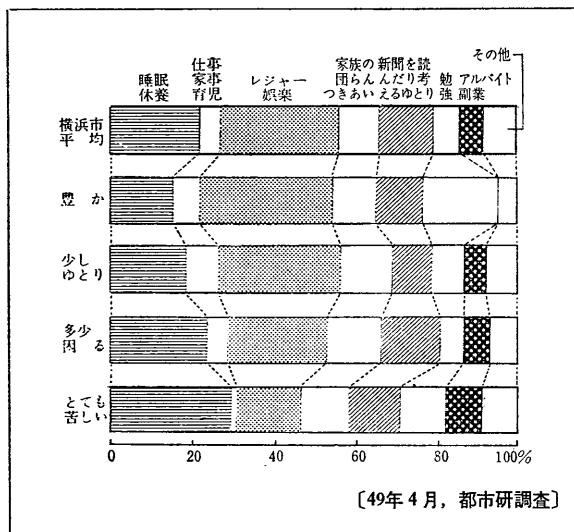
「チャー・趣味・娯楽」の時間がもっと求められているが、四〇代から六四歳までの働いている男性には「睡眠・休養」が不足しているらしく、とくに六〇歳から六四歳の男性の四割が、この時間を欲している。

また「新聞を読んだり考えるゆとり」や「勉強する時間」を欲しているのは男性より女性に多く、とくに三〇代・四〇代の女性が知識欲のあることを示している。

しかしながら、ここでも職業や暮らしむきによるちがいがでている。たとえば、経営管理職や専門技術職では「新聞を読んだり、考えるゆとり」や「勉強の時間」が望まれているのに対し、労務職や自営業では「睡眠・休養」の不足を訴えている人が平均を大幅に上まわっており、毎日の仕事での疲労感が強くみられる。

また「家族と団らんしたり親しい人とのつきあい」の時間を求めているのもこの人たちである。低所得層や暮らしむきを苦しいと感じている人は「アルバイト・副業」や「睡眠・休養」の時間を求めており、ゆとり

図-11 暮らしむきと足りない時間



をもてない人たちの生活の一面をのぞかせている（図11）。